

短 報

日本におけるチドメグサの変異 (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: Variations of *Hydrocotyle sibthorpioides* Lam. in Japan

チドメグサ *Hydrocotyle sibthorpioides* Lam. はアジアからアフリカの温帯から熱帯に広く分布しているもので、幾つかの変異型が知られている。しかしその中には別の種類が混同されている可能性が高い。F1. Malesiana (1949) ではこの地域にチドメグサとオオバチドメの2種類しか書かれていないが、標本を見る限りとてもその程度では納まらない。Bakhuizen-Brink (1965) はF1. Javaでジャワの *H. sibthorpioides* は幾つかの種類の混合であろうと書いている。東南アジアのものは資料が少なく、研究は今後の問題であるが、日本のものでも変異が十分に把握されているとは言いがたいので、その辺のことを述べて今後の研究の一助にしたいと思う。

日本でチドメグサに縁のある植物は *H. yabei* Makino ヒメチドメグサ, *H. japonica* Makino ミヤマチドメグサ, *H. tuberifera* Ohwi オキナワチドメグサである。オキナワチドメグサは現在不確かな種類として扱われている。ヒメチドメグサとミヤマチドメグサとは現在でもそれぞれ独立した種類として扱われることがある。

ヒメチドメグサは葉が小さく、葉身の半ばほどまで深く切れ込んでいる。ミヤマチドメグサは葉はチドメグサと同じくらいの大きさで、ヒメチドメグサ程ではないが、やや深い切れ込みがある。大井氏は日本植物誌 (第1版, 1953) でヒメチドメグサとミヤマチドメグサとは同一種類であるとした。北川氏 (日本の野生植物, 草本編, 1982) も両者は連続的で区別すべきでないとしている。両氏の見解はもっともだと思う。北村, 村田氏の説 (原色日本植物図鑑, 草本編, 1961) のように葉脚の開度での区別は、その傾向は認められるが、それで明瞭に区別することは困難である。両者をひとつに扱うことには賛成である。またミヤマチドメグサとチドメグサとの差異は葉の切れ込みにあるけれど、これもまた程度の問題で、いずれと

も決めかねるものも見られる。ヒメチドメグサはミヤマチドメグサを中間としてチドメグサと連絡すると考えられる。葉の形以外には差異はないから、これらは同一種類として扱われるべきものであろう。ミヤマチドメグサのような葉型のものは中国大陸にも見られる。ヒメチドメグサのような葉型のものが存在することは事実だし、今のところ日本にしか見られない。チドメグサとヒメチドメグサとを変種関係のものとし、ミヤマチドメグサとされるものは、切れ込みの程度でチドメグサかヒメチドメグサとして扱えばよいであろう。ミヤマチドメグサの名のように、ヒメチドメグサ、ミヤマチドメグサは生育が山地に偏る傾向があるが、ヒメチドメグサが王子や小石川植物園など東京のものを基に記載されていることからわかるが、チドメグサとの間に生育環境の違いは見られない。チドメグサで葉の切れ込みの深いものに *var. incisa* B1. というものがジャワから報告されているが、これは葉の裏に毛があると書かれているので、ヒメチドメグサとは関係がないであろう。

チドメグサは葉が無毛で、本州から奄美大島までに分布するが、沖縄本島から台湾北部にかけてのチドメグサとされているものは、葉の表面 (まれに裏面) の脈上にまばらに刺状の毛があり、葉柄の先端部に屈毛が生えている。現在、琉球のものはチドメグサと区別せずに扱われているが、区別すべきものであり、*H. tuberifera* Ohwi, *H. keelungensis* Liu, Chao et Chuang とされるものがこれに当たる。*H. tuberifera* は葉の毛の他に茎の節が肥厚するのが特徴とされ、学名もそれに基づいている。Type 標本には6個の枝が貼ってある。その内の2個体は節が肥大しているが、他の4個体の節は普通である。琉球での他の標本も節の肥大したものはないので、肥大するのは正常な状態ではない。したがってチドメグサからは葉の毛で区別されるだけである。葉に毛のあるチドメグサ

としては、原寛氏がブータンから報告した *H. sibthorpioides* Lam. f. *pilosa* Hara がある。しかしこれは葉の表面は無毛で、葉柄や葉の裏面に毛があり、果実もやや小さい。このような形のは東南アジアにも広く分布しているようで、チドメグサからは別の種類として扱われるべきで、むしろケチドメグサに関係があるように思える。したがって琉球のものは f. *pilosa* とは関係がない。琉球のものは葉に毛があっても、いままで見過ごされていたように僅かであり、これだけで種を別にするにはできず、変種として扱うのが妥当であろう。変種名としては *tuberifera* が使われることになるが、上記したように不正確な理解のもとに付けられた名であって適当ではないが、それを承知した上で使うことが必要である。

Hydrocotyle sibthorpioides Lam. Encycl. Meth. 3: 153 (1789).

var. *pauciflora* (Yabe) Yamazaki, comb. nov.

Hydrocotyle rotundifolia Roxb. var. *pauciflora* Yabe, Rev. Umbel. Jap.: 14 (1902).

Hydrocotyle yabei Makino in Bot. Mag. Tokyo 24: 243 (1910).

Distr. C. to W. Honshu (westward from Fukushima pref.). Shikoku and Kyushu (northward

from Amami Islands).

var. *tuberifera* (Ohwi) Yamazaki, comb. et stat. nov.

Hydrocotyle tuberifera Ohwi in J. Jap. Bot. 26: 232 (1951).

Hydrocotyle keelungensis Liu, Chao et Chuang in Tech. Bull. Exper. Forest Nat. Taiwan Univ. no. 26: 15, f. 15 (1961), syn. nov.

Distr. Ryukyu (southward from Okinawa Isl.) and Taiwan.

Key to the varieties of *Hydrocotyle sibthorpioides* in Japan

- A. Leaves glabrous on both surfaces, petiole glabrous.
 - B. Leaves lobed to upper 1/4–1/3, lobes obtuse at apex, crenate-toothed... var. *sibthorpioides*
 - B. Leaves lobed to upper half, lobes subacute at apex, subacute-toothed... var. *pauciflora*
 - A. Leaves sparsely setose on nerves of upper (rarely lower) surface, petiole usually long-pilose at apex... var. *tuberifera*
- (東京大学理学部附属植物園)

ツクシゼリについて (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: On *Angelica longeradiata* (Maxim.) Kitagawa

ツクシゼリはシシウド属 *Angelica* のものとして扱われているが、他の種類との間には外見的にかなりの相違があって不自然である。葉が多数の細かい裂片に裂けるものは *A. pyrenaica* (L.) Sprengel があるくらいで、他には見当たらない。近縁のカワラボウフウ属 *Peucedanum* には類似した外観のものが多数あるのだから、その所属について再考する必要がある。ツクシゼリは九州の山地のやや乾いた草地に生えていて、このような分布や生育状態から、他所に類縁のものが古い種類とは考えられない。大陸に近縁の種類があるはずである。調べてみるとこれに最も近い種類は朝

鮮の金剛山に生育する *Peucedanum koreanum* Nakai が該当する。外観からは殆ど区別がつかないくらい類似している。これらはさらに満州からダフリアに分布する *Peucedanum baicalense* (Redow.) Koch に関連づけられる。したがって、ツクシゼリは *Peucedanum* として扱うほうが適切だと考えられる。Maximowicz は新種として報告する際に *Selinum longeradiatum* として記載した。*Selinum* は *Peucedanum* に非常に近い属である。ツクシゼリがなぜ *Angelica* として扱われるかにはそれなりの理由がある。*Peucedanum* の背面の3本の稜は細くて尖るがあまり外側に張り出さな